

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 山田 哲

本論文は、後期旧石器時代終末期(2.1～1.0 万年前)の北海道に展開した細石刃石器群を残した先史人の居住・移動・生業システムを、狩猟採集民研究の成果に基づいてモデル化し、統計学的手法を用いて検証した完成度の高い意欲的な研究である。

北海道の細石刃石器群研究では、これまで多くの資料が蓄積されてきたが、北方特有の土壌擾乱現象に影響されて、文化の変遷と資料の一括性を保証する層位的出土例に乏しく、時空間の位置づけが従来困難であった。申請者は、技術形態学・型式論および年代測定値等の手法を用いて資料の有意な単位化を確定した上で、因子分析によってこの技術論的単位が同時に行動論的単位であることを明らかにし、この単位を用いて先史人の居住・移動・生業システムの歴史的変遷過程をモデル化することに成功している。

第Ⅰ章で問題の所在を設定した後、第Ⅱ章以下で分析に着手する。北海道の地理的・地形的形成史を概観した後、細石刃石器群期の居住・移動・生業システムを規定した古環境と動植物・石材環境等の資源構造を記載している(第Ⅱ章)。続いて、現在までに報告されているほぼ全ての資料を対象に、大別7細別14に資料群を区分し編年を行った(第Ⅲ章)。道具と行動の関係に関する現生狩猟採集民研究(民族考古学)の理論モデル研究から、「道具多様性」「多用途性」「融通性」が居住・移動行動と強い関係性をもつことを見出し、資料群に見られるこれらの3側面を数値化して因子分析を行った。その結果前半期の集団は、居住地移動性が高く兵站的行動戦略を取らなかったため特定資源の開発(バイソン等の大型獣狩猟を想定)に収斂していたこと。一方後半期の集団は、居住地移動性が低くなり多角的な資源開発に有利な兵站的行動戦略へと次第に傾斜していたことを明らかにした。これは石材供給行動戦略においても検証されることから、蓋然性はきわめて高い(第Ⅳ章)。

本論文は、北海道の細石刃石器群を行動論的に実証した初めての研究であり、論理展開と完成度の点できわめて高く評価することができる。地域ごとに叙述された居住・移動・生業システムがやや具体性に欠けることや、年代測定値に見られる間隙(1.85～1.55 万年前)の解釈が十分ではないこと等、不満を感じさせる部分もなくはないが、本論文の意義を損なうほどのものではない。

以上より本委員会は、博士(文学)の学位を授与するにふさわしいと認めるものである。